

聖霊降臨後第25主日(特定28)

2010/11/14

聖ルカによる福音書第21章5節~19節

於:聖パウロ教会

司祭 山口千寿

教会の暦は、次の主日で1年の最終主日を迎えることになりました。教会暦が終わりに近づくと、聖書日課はイエスさまが教えられたこの世の終わりについての箇所を読むことになります。この世の終り、また一人一人の終りである死ということに思いを馳せることになります。終末的な雰囲気の色濃く醸し出されてきます。

今日の福音書でも、神殿が崩壊する日が来るという予告が、イエスさまによってなされています。当時のエルサレム神殿は、ヘロデ大王によって再建された壮麗な石造りの建物で、金色に輝く装飾品で飾られていたと言いますから、そこを訪れ眺める人々を圧倒したことでしょう。

特に、石のような堅固な建築材料を用いて造られた豪壮な建築物を目の前にしたならば、その建物は風が吹こうが火が迫ろうがびくともせず、半永久的に存続するのではないかと、安全と安心が保障されたように思い込むようになるかも知れません。

ところがイエスさまは、どんなに頑丈に造られたエルサレム神殿でも、全ての石が崩れ落ちる日が来ると、滅亡を語るのです。神さまの祝福を象徴し保証しているかの如くに見える神殿が、あつけなく崩壊する日がやって来ると、神の審判を告げるのです。

先日、三光教会の新しい聖堂のお披露目の礼拝と祝会に行き参りました。パウロ教会からも、何人かの方が参列し、三光教会の信徒の皆さんと喜びを共にしてくださいました。以前の聖堂のイメージを引き継ぎ、建物が一回り大きくなった瀟洒な聖堂で、落ち着いた雰囲気の祈りの空間がデザインされていました。

30年以上も前から改築計画が持ち上がり、実際に玄関部分の工事が早くに行われましたが、今回の聖堂もそこに繋がる形で造られています。信徒の皆さんの長年の悲願がやっと実現し、献堂することができたわけです。そのための募金も、20年にも及ぼんとする期間をかけ、その間には阪神淡路大震災が起きたために、大切な募金の中から多額の献金をお捧げするということがあったようです。

3週間前に行われた献堂式では、きっと多くの方々が感激に胸を熱くしたに違いありません。早く、新しい聖堂が出来なければ、ご自分の葬儀に間に合わない、心配されたご年配の方もいらしたということです。

旧約聖書のヤコブは、旅の途中で石を枕にして眠り、夢の中で天にまで至る梯子を神の御使いたちが上り下りするのを見て、「これはまさしく神の家である。そうだ、ここは天の門だ」と言い、石を立てて記念碑としました(創世記 28:10-)。

聖堂の建築には、いわばそこからわたしたちが天国へと上って行く天にまで繋がる神の家、天の門を確かなものとしたいという思いが、わたしたちの心のどこかにはあるかも知れません。これで天国行きの切符を手に入れたとまでは言えないかも知れないけれど、安心感に浸るような心地良さが感じられるのかも知れませ

ん。

そのような思いに冷水を浴びせるわけではないでしょうが、イエスさまは、この建物の屋根瓦が一枚も残らず地に落ちる日が来ると警告をなさるのです。他人事ではありません。三光教会の美しい新聖堂を見て、改めてパウロ教会のこの聖堂の素晴らしさを誇りに思うのです。しかしこの建物も瓦礫と化すと宣告されたら、わたしたちはどんな思いがするでしょうか。

そんなことになったら、もうこの世の終わりだと心配が大きく胸に迫ることでしょう。エルサレム神殿の崩壊の予告を聞いた人々も、不安な思いに駆られ尋ねました。それはいつ起こるのですかと危機意識が煽られたでしょう。

イエスさまは、この他にも暴動や民族紛争、大地震、飢饉、疫病などの恐ろしい現象が起きるが、それらはまだ世の終わりではないと注意を喚起しておられます。天変地異や戦争・騒乱などの極限状況が生じると、それに乗じてキリストを名乗って人々を惑わそうとするものが現れて、動揺と迷いの中にある人々を過った道へと連れて行こうとするけれども、うろたえて従って行つてはならないと警告しておられます。

これはルカ福音書が書かれた1世紀の終わりには実際に起こったことでした。そして、わたしたちが生きている21世紀の現代世界においても、尚、同じ状況のもとに教会は置かれているのです。

イラクのバグダッドでは、つい先日も大聖堂で礼拝中の信徒の中に、武装したイスラム過激勢力が侵入し、銃を乱射し爆弾を爆発させたため、50名以上が死亡し、多数が負傷する事件が起きました。この国のキリスト教徒は、自分の国では生活が脅かされ、安全が確保できないことから国外に脱出せざるを得ない事態にあります。

日本では、キリスト者であるという理由だけで、不条理な暴力によって迫害を受けるようなことは、幸なことに今、目の前で起きいてるわけではありません。せいぜい無視されたり、相手にされないということだけで済んでいます。

「幸いなことに」と申しましたが、先の戦争中のように主日礼拝に特高の私服警官がやってきて牧師の説教のメモを取っていったり、教会の指導者が九段の憲兵隊に呼び出されて取り調べを受けたり、拷問されるようなことはありません。確かに教会が信教の自由や言論の自由を謳歌できることは幸いなことだと思います。

しかし、それがただ単に毒にも薬にもならないことを言ったりしたりしているだけのことであるなら、日本の教会は自ずと滅亡に向かって進んで行くでしょう。戦争中に日本の主流の教会では、信仰のゆえにいのちを捧げて殉教の死を遂げた牧師や信徒は1人もいませんでした。今日の聖書のみ言葉をどのように読んだのでしょうか。きっと苦しんだことでしょう。唯一、キリストの再臨と審判、神の支配する新天新地の出現を強調する熱狂的な信仰に生きたホーリネス系の教会だけが、このみ言葉を文字通りに受け止めたのです。その結果、日本の国体を否定するものと見なされ、当局からの弾圧を受けて多くの獄死者を出したのです。

信仰に生きるということは、肉親から裏切られたり、権力による弾圧を受けたり、人々から憎まれ排斥されるようなことが起きたとしても、それを引き受け、それに

耐えていくことです。今日の聖書のみ言葉に、真剣に耳を傾けるのです。

イエスさまは「忍耐によって、あなたがたは命を勝ち取りなさい」と、今日の福音の終わりに勧めておられます。

「忍耐」という言葉を聞くと、余り良い印象を持たないかも知れません。会社なら上司が、家庭だったら親が、無理難題をふっかけてきたとしても、それに文句の一つも言わずに黙って従う、我慢して耐えていく、それが忍耐することだと、思い込んでいるからです。わたしたちが今まで沢山してきたいやな体験から、そのように理解するからです。抑圧的な響きのする言葉として受け止めるからです。

確かに、「忍耐」という言葉は、もともと「ある特定の状況の下に留まる」ことを意味します。しかし、聖書が述べる「忍耐」は、嫌々ながらもそこに居続けるとか、本当は望まないのだけれどやむを得ず辛抱し続けるということではありません。もっと積極的な態度のことです。わたしたちの生活の真っ只中に飛び込んでいって、そこにある苦しみに耐えていくことです。生活の中で起こっていることを五感でもってしっかりと見て、聞いて触れ、味わって嗅ぐのです。生活の中で起こることから逃げ出したり、むやみやたらと戦いを挑んだりするのではなく、そこに起こっている出来事を十分に理解する力が忍耐することです(『コンパッション』)。

コリントの信徒の手紙にある「愛の賛歌」の中に、「愛は忍耐強い。すべてに耐える」とありますが、生活の中に起こる様々な事柄を愛をもって受け止めるのです。愛があれば、忍耐強く関わり続けることが出来るのです。その結果、豊かな実を生むことが出来るようになるのです。

イエスさまは、百倍の実を結ぶ種のたとえを語られましたが、そのたとえを説明して、「良い土地に落ちたのは、立派な良い心でみ言葉を聞き、良く守り、忍耐して実を結ぶ人たちである」と言っています(ルカ 8:15)。ここにも忍耐が豊かな実を結ぶ、豊かないのちの実りをもたらすと、述べられています。忍耐をもって生きる人に、いのちが花開くのです。

わたしたちは目に見えるものに心を奪われ、それに頼って安全・安心を手に入れて生きていく保証にしようとしてしまいます。しかし目に見えるものはすべて過ぎ去って行くものであることを心に留めなければなりません。わたしたちが本当に信頼し、全てを委ねることのできる方は、わたしたちに忍耐する力を与えてくださる方です。その方の慰めのもとに留まるときに、様々な苦難に直面してもそれに耐えて、今を生きていく力に満たされるのではないのでしょうか。